「満州での難民生活と引き揚げ体験」

（匿名希望）89 歳 8 カ月

今年も悲しみ、苦しみ、残念さがこみ上げてくる8月がやってきました。

1. 満蒙開拓団への入植とソ連軍の侵攻

満蒙に夢を抱いた父は、昭和17年2月1日、神戸港より出航し、満州国興安総省布特哈旗沙里講子、

佛立開拓団に入植した。しかし、安楽な生活は5年と続かなかった。昭和20年8月9日、ソ連軍がソ満国境を侵攻、事態は急変した。

父と兄は招集され、残された母と姉と私（小学校5年生）が、20町歩の畑と家畜の世話に追われる身となった。日本の敗戦を現地住民が知って匪賊化し、治安は悪化した。匪賊からの襲撃を避けるため、団長は団員の身を案じ深夜まで議論を行い、救助をソ連軍に求めた。その結果、ソ連軍より捕虜として許可され、8月19日、白旗を揚げて戦車とすれ違いながら450名が扎蘭屯北官舎に収容された。

2. 捕虜生活からハルビンへ

毎朝8時に点呼を受け、8歳以上の男子と男装した婦女子は天拝山の石山に連行され、暗くなるまで破石の運搬に酷使させられた。父は過労のため体を壊し、生命の危機が起きた。病人等がいる家族は排除するというソ連司令部の方針により、我らを含む佛立開拓団4家族と十津川開拓団9家族は扎蘭屯を12月13日、出発させられた。開拓団から離れて単独行動となった我々は、チチハルを経由して12月18日、家畜専用の貨物列車に積み込まれ、北京よりハルビンに12月25日、着くことが出来た。

3. ハルビンでの難民生活

ハルビン日本人会に届けを出した我々佛立開拓団11名は、トキワ難民収容所を紹介された。しかし生活環境を見て危惧を抱き、金策を工面して海東旅館に移る決心をした。

父と兄は全員を日本の地に届けたい一心で働いた。私も住み込み、餅売り、夕刊の立ち売り等をしながら頑張っていた矢先、全員が発疹チフスに感染し、死との闘いが続いた。父は病身であったが自分が倒れたら全員を見殺しにしてしまうと考え、力を振り絞って看病してくれた。しかし、体力の

ない幼い従妹2人が亡くなってしまったことから一行は海東旅館に見切りをつけ、再起を図って春日難民収容所に移った。そして、帰国の朗報を待ち望んでいたところ、昭和21年8月25日、知らせが届いた。病身の母は兄と父の弟妻らと担架隊に合流して、9月23日にハルビンを出発、我々は4日後、出発が叶えられた。

ハルビンを出発した無蓋車は新京、奉天へと走り続け、錦洲に到着した。頭からDDTを浴びせられ、検閲後、最後の難民収容所にやっっとたどり着き、長い苦難に耐えた体を癒した。

4. 待望の祖国日本へ

アメリカの上陸用船艇LSTの配給待ちで錦洲難民収容所に16日間留まったが、港のあるコロ島行きの列車に乗り込み、埠頭に日の丸の旗がひるがえっているのを見て胸が一杯になった。

残っている同胞の幸せを祈りながら、「満州よ、いつか来る日まで」と心でささやき、悲しみと不安と希望を乗せた引き揚げ船は佐世保港に向け静かに岸壁を離れて行った。

5. 今でも胸に残る父の言葉

難民生活中、父からの励ましの言葉が何より生きる支えになった。

1. どんなに辛くとも、死んではならぬ。
2. 国籍、住所は忘れない。祖国日本が待っている。
3. 働く事、生きること事を大切に、きっと幸せが訪れる。

これらの言葉は今でも忘れることは出来ない。